

平成 26 年度教職大学院派遣研修報告書

派遣者番号	26K16	氏名	大塚 啓介
研究主題 —副主題—	小学校理科授業に焦点を当てた授業力向上システムの構築 —教員の授業への取組意識の改善を目指して—		
所属校	三鷹市立第四小学校	派遣先	東京学芸大学教職大学院

項目	内容
I 研究の目的	<p>知識基盤社会化やグローバル化が進む現代において、理科では知識・技能の確実な定着を図るとともに、科学的に思考し、表現する力の育成が求められている。しかし、平成 24 年度東京都教職員研修センター教科基礎調査研究の結果によると「理科の指導に自信がある」に否定的な回答をした小学校教員の割合は約 65.1%で、「理科の観察・実験の指導内容に関して必要な知識を十分もっている」という質問でも、半数以上が否定的であった。児童を指導する小学校教員の理科離れの理由として、専門知識の少なさの他に、観察・実験という体験的な活動と知識・理解や思考力の育成を図る知的な活動が一つの授業内で行われるなど、指導の難しさがある。教員の力量を高めるために、今まで研究授業を中心とした授業研究が大きな役割を果たしてきた。同僚などとの対話から多くのことを学ぶことができることが、大きな利点である。しかし昨今、教員は多忙を極めており、自己研さんを積むための研修に多くの時間を割くことができない現状がある。</p> <p>では、従来の研究授業方式の授業研究だけでなく、教員の力量を高め理科授業への苦手意識を改善するには、どのような取組が必要なのであろうか。このことについては、他者の視点を取り入れることの重要性を踏まえ、グループによる授業研究が教員の力量を高める有効な改善策であると考えられる。また、教員の力量として、常に改善しようとする自己革新力が重要であり、教員の専門的な学びは、実践過程における反省的思考を繰り返すことなど、省察することで授業改善につながっていくと考えられる。しかし、計画的かつ持続的に他者からの視点を取り入れた省察を促す具体的な支援策は行われてきていない現状もある。</p> <p>以上のことから、本研究では、小学校理科の授業に焦点を当て、グループや個人による授業後の教員の省察を促す支援を繰り返すことなど、教員の授業への取組意識の改善を図る授業研究システムの構築を目指そうと考えた。</p>
II 研究の方法	<p>1 授業改善システムの構築</p> <p>F. コルトハーヘンが確立した省察モデルを採用し、省察を促すための授業改善システムを構築した。授業への取組意識を改善するために、①「小学校理科の授業におけるリフレクション・ワークブック」の作成と活用、②グループワークの実施を支援策として取り入れる。</p> <p>2 第 1 期グループワークによる省察の実施と分析</p> <p>同僚性を生かし、日頃から協力し合う関係にある同学年教員によるグループワークを行うこととする。実践した授業を撮影したビデオを視聴して、気付いたことを話し合う。学年は第 3・5 学年を対象とし、グループワークを週 1 回(30～45 分)程度設定する。視聴時間は話し合うテーマに沿って 10 分以内とし、授業者自身が授業直後とグループワーク後に「小学校理科の授業におけるリフレクション・ワークブック」を用いて、振り返りを行う。その後、実施した省察場面を分析し、第 2 期に向けて修正点を検討する。</p> <p>3 第 2 期グループワークによる省察の実施と分析</p> <p>第 1 期における省察方法の修正を基にグループワークを実施し、分析を行う。また、グループによる省察場面での発言分析とリフレクション・ワークブックの記述分析、授業記録を基にした IRF 三項発話連鎖構造分析による考察を行う。</p>

	<p>4 授業者によるインタビュー調査とまとめ 省察の記録や授業中の教員及び児童の発話記録、インタビュー調査に着目し、授業改善システムが有効に機能し、授業者の取組意識の改善につながったかを分析、考察する。</p>
<p>Ⅲ 研究の結果</p>	<p>1 省察場面の分析 (1) 第1期 自己の授業をビデオ映像で見ることで、児童への指示の出し方や児童の言動を客観的に捉えることができた。しかし、問題点の指摘や助言に対して、自己の意図との食い違いから、省察が反省になってしまうという課題が見られた。映像で見える言動のみで問題点を判断していったため、本質的な問題や長所への気づきまでたどり着かないという課題が出た。 (2) 第2期 省察の仕方を工夫する必要があるため、教員と児童の欲求や行動、思考、感情の食い違いを見付け、そこから授業を改善していくポイントを探ることとした。省察場面での気づきによって見られた変化は主に二点ある。第一は、授業者が問題点に気づかない気がかりな場面で、問題点や原因を探り解決策を考えることができたことである。第二は、児童の行動の裏側に隠れた思いを授業者が読み取り、解決策を考案することができたことである。</p> <p>2 教室内発話記録の分析 (1) 発話の割合変化 グループワークを行い、客観的に自己の授業を観察することで、教員の一方的な説明が多いことに気づくことができた。その結果、教室内発話の教員による働き掛けの説明・情報提示の割合が減っており、質問・発問の割合や、児童による応答の割合が増加した。併せて、児童の声を反映する授業となり、教室内外対話が増加した。 (2) グループワーク後の教員による働き掛けの変化 前時の振り返りで課題としていた点を受け、児童の意見を引き出すような発話が増えた。また、仮説・予想に対する理由を引き出したり、児童の意見を他児童に説明をさせることで明確化や再解釈化をさせたりしていた。意見に対して根拠を示すことを促す言葉掛けや説明できるレベルまでの理解を促すことを心掛けた授業を行っている。グループワークによって、授業構成を改善しようとする意識が高まり、教員による働き掛けを変化させたことがうかがえた。</p> <p>3 インタビュー調査の分析 自己の授業を客観的に見ることができたので、目に見える問題や教員と児童の思いの食い違いから見られた気づきなどから児童の意見を広げたり、深めたりする発問を意図的に使うようになった。グループワークを通して、児童が何をしたいのか、何を考えているのかなど、授業に対してその場にいる児童と一緒に授業づくりをしようとする意識が出てきていることがうかがえる。</p>
<p>Ⅳ 考察</p>	<p>本研究では、小学校理科の授業に焦点を当て、授業後の教員の省察を促す支援を繰り返し行うことで、教員の授業への取組意識の改善を図る授業研究システムの構築を目指すことを試みた。その結果、以下の二点が明らかになった。 第一に、お互いを理解し合える学年でグループワークを行い、授業者と児童の欲求や行動、思考、感情の食い違いから問題点を導き出し共有することで、授業を改善していく視点が明らかになるということである。 第二に、小学校理科の授業におけるリフレクション・ワークブックを活用して自己の授業についてメタ省察していくことで、現在の授業に対する考え方や次時以降への展望を考えるきっかけづくりになるということである。 これらのことから、省察を促す支援が授業への取組意識の改善に働いていたと考えられる。今後、日頃の授業を基に計画的、かつ持続的にを行いながら、小学校理科の授業に対する意識改善を図ることで、児童の資質・能力の変容を促すことができるシステムの構築を目指していきたい。</p>

